

「フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』における生活世界と主観性の構造の関連について」

小島 雅史（本学社会学研究科修士課程）

我々は日常において様々な自明性を抱えている。例えば、目の前にある何かが実際にそこに存在していることもそうだ。その我々が持つ自明性の最も重要な問題として『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1936、以下『危機』）でフッサールが取り上げたのが、生活世界である。生活世界とは、我々の生の地盤であり、どんな経験もその内で行われると定義される。そして、その生活世界の分析の際にフッサールは、主観性の分析と関連させる形をとっている。本報告では、生活世界と主観性の関連に注目し、何故生活世界と主観性が互いに独立に分析されるのではなく、関連の中で分析されたのかということ明らかにする。

生活世界は上述のように、生の普遍的な地盤とされ、フッサールによれば、あらゆる認識はそこでの経験から得られたことを根拠としている。しかしその普遍性の故に、生活世界はあまりにも自明なことでされ、基礎付けの役割を常に担いながらも、真に主題化されてこなかったとフッサールはいう。そこで、この生活世界の自明性を解明にもたらそうという試みが『危機』では成される。

まずその試みに際し、フッサールは判断中止という作業を行う。これは例えば、ある対象の实在を認める、といった我々の素朴な判断を保留する作業と定義される。この判断中止によって、ある妥当な認識が、如何にしてそのような妥当性を持つものとして我々の意識に現われたかという、その現われ方の構造を問い直すことが出来る。つまりフッサールは判断中止によって我々の経験の構造を解明すると共に、その経験の構造の中での生活世界の位置付けを見ようとするのである。

ポイントとなるのは、フッサールが生活世界と主観性の両者を相互規定的に論じようとした点である。

一方では主観性が如何に経験を構成するのかと問う中で、生活世界の輪郭が明らかになる。その際問題は生活世界とは何かということではなく、生活世界が所与として意識に与えられるそのあり方とはどのようなものかということに移っている。この転換は、主観性が構成する諸々の経験の構造を生活世界の分析の手引きとすることを可能にする。つまり、生活世界がどんな経験に対してもそれを基礎付けるという形で関与するが故に、それぞれの経験が生活世界の与えられ方の指標となるのである。

また他方で、生活世界のこの普遍的基礎づけの役割が、主観が構成する諸経験の統一にとって重要な役割であることが示される。何故なら、生活世界が主観と関係しているという形式が諸経験に常に保持されていることによって、生活世界が、主観の構成する諸々の経験を、単にそれぞれ個別的なものではなく、他の経験と関連付けられるための地平の役割を果たしているからである。

このように、生活世界と主観性の説明を行うためには、双方の関連が必要なのである。この点を詳細に報告することになる。